

こびどのおくりもの

昔むかし、あるところに、まずしいお百姓ひやくしやうがいました。お百姓は、せなかに大きなこぶがありました。そのことで、村の人たちはいつもお百姓をからかいました。とりわけ、けちでなさけ知らずのとなりの金持ちは、ことあるごとにお百姓をあざけりわらいました。

ある日の夕方、満月まんげつがのぼるころ、お百姓は、森のはずれにある畑に出かけていきました。すると、教会の塔とうから、ゆうべのいのりをつげる鐘かねの音が聞こえてきました。お百姓は、ひざまずいていのりをささげました。そのときとつぜん、森の中から、かすかにダンスの歌声が聞こえてきました。

お百姓は、声のするほうへそっと近づいていきました。しげみのかげからのぞいてみると、森の中の草地で、こびどたちがたくさん集まって、わになってダンスをしています。こびどたちは、おどりながら、くり返しこう歌っていました。

月曜日 火曜日 水曜日

月曜日 火曜日 水曜日

お百姓は、しげみのかげからとびだして、こびどたちに、

「どうして、月曜日、火曜日、水曜日としか歌わないんだい。木曜日、金曜日も歌えばいいのに」といいました。

するとこびどたちは、

「そいつはいいや」と、声をあげ、こんどはこう歌いました。

月曜日 火曜日 水曜日

月曜日 火曜日 水曜日

それから木曜 金曜日

こびどたちはお百姓の手を取りました。そこで、お百姓もいっしょに歌っておどりました。

おどりが終わると、こびどたちはお百姓に、

「歌のお礼に、なにかほしいものはないかい。金や銀をどっさりあげてもいいよ」といいました。お百姓は、

「金や銀がなんの役に立っつていうんだ。せなかのこぶを取ってくれるんなら、そんなものはいらんよ」と答えました。

すると、こびとたちはお百姓をつかまえて、まるでハンカチのように、くるりと放り投げました。お百姓がまた地面におりたつたとき、せなかのこぶが取れて、からだはろうそくみたいにまっすぐになっていました。

お百姓は大よろこびして、こびとたちが行ってしまいうまで、なんどもお札をいいました。

家に帰ると、村の人たちは、みな、びっくりしました。なかでもとなりの金持ちは、たいそうおどろいて、

「どうしてせなかのこぶがなくなったんだ」とききました。そして、お百姓から、こびとがねがいをかなえてくれたと聞くと、自分もほしい物を出してもらおうと、森へでかけることにしました。

金持ちは、つぎの満月のぼんを、待ちかねるほど待ちました。ようやく満月のぼんになると、金持ちは、森のはずれに出かけていきました。すると、森の中からダンスの歌声が聞こえてきました。金持ちがそつと近づくと、小人たちは、わになっておどりながら、歌っていました。

月曜日 火曜日 水曜日

月曜日 火曜日 水曜日

それから木曜 金曜日

金持ちは、しげみのかげからとびだして、

「いや、それじゃあだめだ。この歌はこうしめくくるんだ。

それから木 金 土曜日

日曜日はお休み

ってね」

こびとたちはすっかり気にいって、

「そいつはいいや」と、声をあげ、おどりながら歌いました。

月曜日 火曜日 水曜日

月曜日 火曜日 水曜日

それから木 金 土曜日

日曜日はお休み

金持ちは、こびとたちが、ほしいものはないかとたずねてくれるのが待ちきれません。でも、こびとたちは、金持ちのぎろぎろした目を見ると、何もいわず、ダンスにもさそってくれませんでした。

とうとう金持ちははらを立てて、

「このばかなこびとやろうめ。おまえたちは、となりのまぬけに、歌のお礼だといって、金や銀をやくそくしてやったんだろう。あいつはことわったそうだがね。それで、わしのじょうずな歌のお礼には、何をくれるんだ」といいました。

こびとたちは、

「まあ、そうおこりなさんな。いったい、何がほしいんだね」とききました。

金持ちはよく考えました。でも、金とか銀とかいうのは気が引けました。そこでしばらく考えてから、こういいました。

「となりのまぬけがほしがらなかった物が、わしののぞみの品だ」

するとこびとたちは、金持ちをつかまえて、まるでハンカチのように、くるりと放り投げました。金持ちがまた地面におりたったとき、どうなっていたと思えますか。そう、せなかに大きなこぶがついていたのです。

こびとたちはたち去って、二度ともどってきませんでした。そこで、よくばりの金持ちは、一生、せなかに大きなこぶをつけていなければなりませんでしたとき。

出典 『語りの森昔話集1おんちよろちよろ』村上郁再話

原話 『グリム童話と近代メルヘン』竹原威滋／三弥井書店